

特 104

3

物 幕 四 作 ン セ フ イ
 究 研 の ル レ ブ ア ガ ・ タ ツ ヘ
 著 庵 柴 田 柴

二 一 九 一

京 東



始



104-3

特104
3

物慕四 作ンセブイ
究研のルレブアガ・ダツヘ

著庵柴田柴

EX LIBRIS

二一九一

京東



ヘツダ・ガアブレルの研究

イブセンの『ヘツダ・ガアブレル』が、彼の勞作中、如何なる位置を占むるかといふ問題は、此研究を始めるに當つて、誰しも思ひ及ぶ所であらうと思ふ。それに就いて、彼の有名な批評家ブランドスは、次の如く分類して居る。

『吾人が、かの戀愛と傳説とを取扱つた、處女作の戯曲と、重くるしい、處女作の詩歌（『戀のおかしみ』、『ブランド』、『ペヤ・ギント』、『青年團』）を見捨てるならば、其跡には、イブセンをして世界的の名聲を博せしめた、十二編の壯年時代の近代劇が残る。此等の十二編の戯曲中、最初の六編は、政治的社會の矯正を論じたもので、『社會の礎』、『人形の家』、『再生』、『人民の敵』、

“For once in my life, I want to be
master over a human fate.”—*Hedda.*

『野鴨』、『ロスマアスホルム』等が、此部類に属す。残りの六編は、論戰的でもなければ、亦深遠な心理を説いたものでもない。それらは重に男女間の親しい關係を、取扱つたもので、凡ての場合に於て、女性が立役者になつて居るとは、いへない迄も、兎に角、女性が主要な位置を占めて居る。『海よりの夫人』、『ヘツダ・ガアブレル』、『建築師』、『アイオルフ』、『ボルクマン』、『蘇生の日』等は、凡て此部類にはいる。それは家族的悲劇、又は個人的悲劇であつて、政治的の社會からは全然離れて居る。』

其他の評家の分類法も、略ぼこれと同様である。即ちイブセンの勞作時代を三期に分ち、彼が眞に不朽の世界的名聲を博したのは、其青年時代に作つた、豊富な想像を披瀝した作物でなくして實は後年の作に係る、所謂社會劇に在るのだとして居る。其社會劇も、『社會の礎』から『蘇生の日』迄の十二編が、恰度廣い意味から折半されて、最初の六編、『社會の礎』、『人形の家』、『人民の敵』、『野鴨』、『再生』、『ロスマアスホルム』は、現在組織されて居る、人間社會の政府に對して、政治的の反駁を主張した者と見られ、後半の六編『海よりの夫人』、『ヘツダ・ガアブレル』、『建築師』、『幼きアイオルフ』、『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』、『蘇生の日』は、重に個性の心理的解剖を試みたものの様に認められて居る。而して此長い戯曲の連鎖を通して現れた、社會的

倫理に對する一般的の傾向は、最初は秩序もなく勃興した、今日の個人主義に對つて、何もこれといふ目的もなしに、反駁を加へたものが、後には漸次、社會化されたる自由の辯護に變化するに至つた。此點に於ても亦、大概諸家の説が一致して居る。

併し乍ら『ヘツダ・ガアブレル』は、右に述べた様な性質の外に、更により密接な關係のある説明をもつて居る。それはイブセンが、此作を書いた時の心持と、其態度とに據るのである。彼は一八九〇年の五月から同年十一月まで、引續いてミュンヘンに逗留した。恰度其頃、彼の周圍には色々うるさい事件が多かつたので、彼の心は悲しい思想と、悲しい情緒とに鎖されて居た。かういふ時機に際して、彼は涉々しく進まない筆を執り乍ら、夏休みもせず、書上げたのが、即ち此作である。彼がかたるのに、『此戯曲の中に、社會問題を取扱ふのは、余の望む所でなかつた。余の最も望んだ所は、現存の或る社會的狀態と原理とを基礎にして、其上に人間と、其情緒と、其運命とを、描寫する積りであつた』とある。これと同じ意味の言葉が、イブセンを佛蘭西に紹介した、プロツツォア伯に宛てた手紙の中にも見えて居る。

かういふ事實のある所から、多くの批評家は、イブセンの『ヘツダ・ガアブレル』に對する態度を評して、理想を棄て、寫實を執つたといひ、或は主觀的の態度を出で、客觀的の態度に入つ

たと云ひ、或は典型の描寫を去つて個性の描寫に赴いたとも云つて居る。言ふ言葉に色々の相違はあるが、要するに、『ヘツダ・ガアブレル』が問題劇ではなくして、一種の性格劇であるといふ點に至つて、凡ての諸説が纏つて居る。しかも彼等の多くは、イブセンの勞作中で、此劇だけが特別の性質をもつて居るやうに力説して居る。それも宜しい、殊に『ヘツダ・ガアブレル』丈を取出して、特別に論ずる場合に於て、非常な好都合である。併し乍ら餘りこれを力説する結果として、其當時のイブセンの心的状態も追究しないで、唯だ慢然たる獨斷的性格評を下すのは、大膽な話しだともおもふ。例の皮肉なバナナアド・ショウは、『ヘツダ・ガアブレル』を象徴的に解釋した故を以て、或る一部の批評家から、餘りにこじつけのやうに評されて居るが、余は決してさうは思はない。元來、ショウは其著『イブセン秘義』を通して、イブセンの勞作を、理想と理想家との二方面から説いて來たので、しかも『ヘツダ・ガアブレル』には何等の理想も含まれてない事を明言して居る。彼は其だけの理解力の上に起つて、更に『ヘツダ・ガアブレル』の中に、『ボルクマン』や『蘇生の日』に現れたやうな象徴を見出したのに過ぎない。即ち彼の解釋は、彼の個性の反映である。而して余は、それが充實した個性の反映（詭辯でなくして眞實である）であるならば、どんな解釋の中にも、充分尊敬を拂ふだけの價值があると思ふ。が余は何もショウ

一人を辯護するのではない。唯『ヘツダ・ガアブレル』の、イブセンの勞作中に於ける地位は、それを他のどれとも違つたものだといふ前に、先づ少くとも、それと他の作物との關係や、又は作者の其作物に對する態度に就いて、出来るだけ明瞭な理解が必要だといひたかつたのである。

二

イブセンは、『ヘレツダ・ガアブレル』を、一八九〇年十一月十八日に脱稿した。茲に復た一つの問題が起つて來る。それは、若し『ヘツダ・ガアブレル』が、寫實的だといふ事を承認するとすれば、果して幾年頃の何處を寫したものと云ふ疑問である。審美學者のエミール・ライヒの説に據れば、『イブセン』は、一八七六、一八七七、一八七八、一八八二、一八八三、一八八四、一八八九、一八九〇年の、八年間の夏期を、『ブレンテルバツスの麓に在る小さな街』（ミュンヘンの區域にあるゴツセンザツツといふイブセンの避暑地をさす）に過ぎた。而して諾威の原書を見れば、『ヘツダ・ガアブレル』は、其町に於て書かれたとある。故にそれは、其期間のミュンヘンを寫したものである」と云うて居る。其他の獨逸の批評家は、大體に於て、此説に賛成して居る

やうではあるが、これ程明確に断言はして居ない。或る批評家の如きは、『ヘッダ・ガアブレル』は、時空を以て制限すべき必要を認めない、もう少し廣義な世界的の作物であると言つて居る。獨逸の批評家が、餘りイブセンの逗留地としてのミュンヘンを高調するので、それに對つて皮肉を報いたのか、英國の批評家、エドマンド・ゴッスが言うのに、『獨逸の批評家は、テスマンの "tastefully decorated villa" の経緯度を探し飽ぐんで、世界的または一般的のものとして了うた。併しそれは一八六〇年代の、クリスチャニヤの西端を寫したものに違ひない。余はイブセンが何故一八九〇年代の同じ町を寫さなかつたかを怪しむ。それはイブセンの永い放浪（一八七六年來、故郷を離れてミュンヘンに旅した事）が、彼に薄い印象しか與へなかつたからであらう。』

過般我國に渡來した、ウキリアム・アチャ氏は、倫敦から出した其英譯『ヘッダ・ガアブレル』の緒論に、之れは劇其物の批評に據るより外に仕方がないから、従つて何も書く必要がないと言つて居る。これは少々亂暴だが、實は余も亦、かういふ史實には、左程重きを置く必要を認めない。が併し研究の順序として、かういふやうな説のある事を知つて置くのも、穿ち無駄ではあるまい。

寫實といふ意味からいうて、『ヘッダ・ガアブレル』の扮本ともすべき話のある事を、ブランド

スが書いてから、さういふ種類の話が澤山に出た。其中で重要なものだけを、二つ三つ擧げて見やう。レヨウボルクの原稿が亂暴にも焼棄てられた事は、其頃コオペンハアゲンのさる有名な作曲家の妻に、非常に嫉妬深い女があつたが、何をどうかん違ひをしたものか、詰らぬ事から夫に捨てられたものと思ひ、折角自分の夫が完成した合奏の樂譜を、夫に對する復讐のつもりで焼捨てた事から出て居る。レヨウボルクが酒に迷はされて、昔の耽溺性を現す事は、諾威に廣く名前を知られた、ある婦人に關する噂さを利用して居る。それは、其婦人の良人は、もと非常な飲酒家であつたのが、意志の力で以て、遂に其惡癖に打勝つた。すると一日其婦人は、彼女の良人に對して有つて居る勢力を示す爲に、其良人の室に、多量の酒を運んで置いた。而して其計略は、恰度彼女の預期して居た通りの結果をもたらした、といふ事である。またイブセンの友達に、一人の若い丁抹人があつた。其人は非常に頭腦の明晰な、而して學識の深い人であつたが、唯一つ嗜みに於ても亦貞操に於ても、意體の分らぬ女を好む惡癖をもつて居た。レヨウボルクが赤い毛のデアナに通ふ事は、此學者の遺言狀から暗示を受けて居る。また酩酊した結果、大切な原稿を紛失して、遂に自殺をしたのも、此若い友人であつたさうだ。次ぎに叔母ユリアアナのモデルは其頃ドレスデンに住んで居た、エリゼ・ホオルックといふ、諾威の一婦人である。彼女は其時、

氣の違つた妹の看護をして居た。尙ほ此種の話は澤山あるけれども、かういふ話の分量に由つて『ヘツダ・ガアブレル』の價值が、どうなるといふのでもないから、これ位で止める事にする。唯だ『ヘツダ・ガアブレル』の構造に對して、イブセンが如何に寫實的の態度を取つたか、といふ事さへ分れば、それで充分である。

エミール・ライヒの統計に據れば、『ヘツダ・ガアブレル』の始めて出版されたのは、一八九〇年の十二月十六日で、引續いて獨逸譯が現れ、一八九一年には、二つの英譯と三つの露譯とが出た。尙ほ一八九二年には、佛蘭西語に（ブランドスは一八九一年説）、一八九三年には、伊太利語に、一八九四年には、西班牙語に（これもブランドスに據れば、一八九二年）、一八九五年には、葡萄牙語に譯されて居る。其間に獨佛其他を除き、唯だ單に英語とスカンデナヴィア語とだけに書かれた、『ヘツダ・ガアブレル』の擬似曲が、少くとも六つ以上に上つて居る。これらの出版と同時に、『ヘツダ・ガアブレル』は、歐米諸國の各劇場に於て演せられた。而して殊にヘツダの役は、デユゼ、ナジモヴァ、ロピンス、キャンベル等の名女優によつて、扮せられて居る（附録参照）。

三

近代劇の組立法に關しては、リッハルト・エム・マイエルの「充實した場面の戯曲」、Drama des reifen Zustandes “*なか*、又はヘルマン・シユラアクの「逆行的動作」、rückläufige Handlung “*どか*頗る適當な名稱が、與へられて居る。併し乍ら實際に當つて觀察するとき、單にこれらの言葉がふくんで居る意味だけでは、近代劇の構造が説明され難い事を發見する。此兩氏の組立法は別に「展開法」、Auswirkung “*とも*云つて、一つの戯曲の骨組を、既成の事實として、一番最初に作つて置き、舞臺の上に現はされる動作は、其事實が如何にして成立したかを説明する、分解的の動作のみで足るやうにするのである。然らば此「分解的」の組立法は近代劇にのみ、特有の組立法かといふに、さうではない。希臘劇中有名なソフォクレスの「エデバス」は、始めより終りまで、此分解的組立法に據つたものである。退いて在來の組立法を觀るに、それは「綜合的」に出來上つて居る。即ち最初には充實して居ない場面を現し、それが幕の重なるに従つて發展し、遂に大詰に至つて綜合され、善惡ともに判明するといふ趣向である。シエイクスピア、デ

イテ、シユルレル乃至、我國の歌舞伎作者の慣用手段は、凡て此組立法に據つて居る。併しこれとても、必ず古い戯曲にのみ、限られた組立法ではなくして、近代劇にも此法に據つたものが、澤山にある。又此二つの組立法を併用したのもある。結局戯曲の組立法としては、分解的に行か、総合的に傾くか、或は此二者を併用するか、此三種の外に出る事が出来ない。

假りにかういふ組立法の標準をきめて置いて、『ヘッダ・ガアブレル』を観るときは、其處に面白い傾向が見られる。イブセンの青年期の作は、概ね総合的組立法に基いて居ることは、『戀のおかしみ』、『叛逆人』、『ブランド』、『皇帝とガリリアン』等に徴しても明瞭であるが、中年の作『社會の礎』、『人形の家』、『海よりの夫人』等に至つては、此等の二つの組立法を併用して居る『ヘッダ・ガアブレル』は、將に此部類に屬すべきである。『インゲル夫人』、『諸酋長』などに稍や用ひられた分解的組立法は、『再生』、『ロスマアスホルム』、『野鴨』、『ボルクマン』等には完全に適應されて居る。而して此順序が必ずしも、イブセンの著作順と同一でない事は、一寸注意を要する。それは前者は形式上の變化で、後者は心理的の變化であるから、前者と後者ととは、一致する場合もあり、一致せぬ場合もあるのである。

イブセンの使用した登場人物の数は、他の近代劇の作家と比較して非常な變化に富んで居る。

彼の初期の作物を観る時は、其如何に群集を取扱ふ事に於て巧みであつたか分る。殊に『ブランド』、『ペヤ・ギント』、『叛逆人』、『皇帝とガリリアン』を読む時に、然か感ぜしめられる事が多い。併し後年の社會劇には、全体の調和「ensemble」が、六人から八人位の間で制限されて居る。而してそれは數に於てこそ、少くはあるが、其一人々々の性格は、甚大の注意を以て、研究されて居る。『ヘッダ・ガアブレル』の七人も此點から觀て、多大の興味を與へるのである。

凡そ分解的組立法に由つて作られた戯曲にあつては、其悲劇的の興味は、何時でも過古に起つた事實に托せられてあつて、緊張した現在の動作は、必ずしも要求はされないものである。因襲的作法を踏んで居る作家は、此過去に於ける事實を言ひあらはす爲に、獨唱的「Solovortrag」または秘曲的「Bravouraria」の臺辭を、多く使つて居る（シエイクスピアの獨白などは、此適例である）。然るにイブセンは、總て此やうな使ひ古された繩墨を破壊して居る。『ヘッダ・ガアブレル』に於てなごも、ヘッダ對レヨウボルク間の、舊い歴史は、彼等の周圍に在る、補助的人物の口を通して、纔かに其閃きを見せて居るだけで、事實の真相は、兩人の間だけにすら、最後まで判明させない。けれども、それらの各々違つた人の口から、短い文句の中に、総合的に集められる報告は、吾等に事實より尙ほ以上の想像を逞しくさせて、且つ其處には、各人各色の共鳴を

感するのである。此新しい方式は、更に極度まで應用されて、イブセンの象徴劇となり、尙ほ曳いてマアテルリンクの神秘劇にまで、影響したのである。

イブセンの脚本には、やま、coup de theatre がある。ワシントン大學に獨逸文學を講じて居るオットオ・ヘルレルは、これをもつてイブセンが、其頃流行して居た、佛蘭西式の技巧に感化されたかのやうに言つて居るが、さう一概に斷言も出来まいと思ふ。ウキリアム・アアチャアはこれを以て、一般的メロ・ドラマになくてならぬ特色とし、イブセンの戯曲が單に讀まれる脚本でなくして、如何なる國の舞臺にでもかけ得べき事を確言して居る。何時でも對社會といふ事を念頭に置いて居る、劇評家アアチャア氏の言としては、將にさもあるべしと肯かれる所が多い。やまとは、一體何であらう。單に期待されない、事件の偶發だけでは、充分な説明といふ事は出來ない。演劇的對偶、dramatic antitheses の、明白なる過剰を含まねばならぬ。でなければ自然に起つた事件の偶然と、作者の想像に由つて作上げた不自然の對偶との間に、それを區別するだけの標準が立たない。「人形の家」はイブセンの作物中、最も多く舞臺にのせられ、且つ最も能く人に知られて居るが、他の一面に於ては、最も多くやまを有つた作物である。たとへばノラが「かうやつて、生を樂しむといふ事は、何とまあ、不思議な事ではせう」といふと、それと同時に

に縁奇の悪いベルの音が、ホオルの方に聞えて、例のクログゲスタッドが偶然入つて來る。其處には期待外といふ事と、生の樂みと恐迫の悲みの對偶とが、埋伏されてある。これをもう少し具體的に現したのが、同じ幕でクログゲスタッドが、ノラの其子供と遊び戯れて居る瞬間へ、顔を出す場合である。其ほか、クリスマス旅行が、クログゲスタッド一人のために奪はれる事、ノラとはさして縁故の深かるべき筈のないリンデンが、一日にして十年の友のやうな態度に豹變する事、ノラが其頃流行のタランテラ踊をやる事、考へれば考へる程、深い動機から出た事ではなく唯だ單に筋を運ぶための、やまをつけた形跡の多いのに驚く。かういふ弛み懸つた筋を緊張させる場合、erregende Moment は、單に此「人形の家」に計りでなしに、「社會の礎」にも、「野鴨」にも、「建築師」にも、澤山に用ゐられて居る。併し「ヘッダ・ガアブレル」には、幸にもかうした形跡は、大して著しく現れて居ない。故に、其登場人物の自然不自然は別として、此意味から、余は「ヘッダ・ガアブレル」の筋を自然であるといふのに、躊躇しない。

四

戯曲の組立の中には、性格の配置といふ事も含まれて居る。イブセンの作物に在つては、補助的人物の性格が極めて能く働いて、其中に含まれて居る思想に、最後まで力を加へて居る。而して其目的を貫徹する爲に、對比または類似の方法が用ゐられて居る。手近の例を取れば、『ヘツダ・ガアブレル』に於ては、あの目的も希望も有つて居ない、極て投遣りの生活を營んで居るヘツダに對比して、他人の爲に力を盡さねば、一日も生甲斐がないといふ叔母ユリアアナ・テスマンが置かれてある。『海よりの夫人』に於ては、かの何處々々迄も風土に馴れて行く技倆をもつたバレストッドは、自分の周圍に調子を合せる事が出来ないで、恰度水から外へ出された魚の様なエリダに對して、最も善い試切りの刃である。『人形の家』に於ても其通りで、あの遣る瀬ない存在を持續して居るランク先生が、一言いへばいふ度に、ノラの其子供に對する責任が重くなつて来る。『ボルクマン』に於ては、フォルダガルの自卑といひ、ガアブリエルの自尊といひ、其處に極端な對照を作つて居るが、人生の落後者といふ點より觀れば、兩方とも類似の傾向をもつて居る。これが即ち兩々相喚發して、『ボルクマン』といふ芝居を面白く見せる所以である。博士、坪内逍遙は、『ヘツダ・ガアブレル』を評して次の如く言つて居る。『次に此作中には男も女も三類に寫し分けてあるのが面白い、迂腐な學究肌としてのテスマン。世故通自慢の放蕩者と

してのブラック。詩人肌デカダン肌としてのレーヴボルク。それから舊式の、言はゞ十八世紀式の只の女としての叔母ジュリヤ。ロマンチズム時代の理想の女としてのテヤ。作者自身を女にしたやうな自意識の強烈な、本能主義の、それであつて内實頗るロマンチックな、妙に矛盾した新性格を代表する女としてのヘツダ。性格を寫し分けたばかりで無く、かやうに時代精神の推移をも書き分けた所が、此作の趣味深い特色である。……私は第一にヘツダの性格に、第二には此二代並寫といふ點に、甚深の感興を覺えるのである』と（千葉掬香氏譯『ヘツダ・ガブラア』序文参照）。要するに、此三代並寫の説なども、矢張性格の配置からみた觀察であると思ふ。

戯曲の統一：unities。の中で、最も問題の多いのは、時間の統一である。イブセンは、大體に於て、此統一を守つて居るが、『ヘツダ・ガアブレル』は、此法式を破つたもの、一つである。一體此統一といふものは、意識の集注を目的として定められた、カンヴェンショナルの法式であり且つこれを制定した人々でさへ、守るより破る方が多い位のものである。特に時間の統一に於ては、甚だしい。故に場所及び動作の統一は別として、時間の統一は、それを以て戯曲の巧拙を測る、繩墨にはならない。要は其時の心張である。其時の心持に従つて、緊張した思想を緊張した時空に盛れば、それで善いのである。言ひ換へれば、戯曲の内容から、時間が生ずるので、時間

の長短から、戯曲の内容が生れるのではない。イブセンは時間の統一よりも、其時の調子、其時の心持を統一する事に、重きを置いたのである。エミール・ライヒの統計に據つて観るに『再生』は凡そ十六時間を要し、『インデル夫人』は、五時間を費して居る。『人形の家』は、六十時間に涉つて居る。『社會の礎』、『海よりの夫人』も、略ぼ同じ位の時間をとつて居る。『ロスマアスホルム』が五十二時間、『野鴨』が四十時間、『ヘッダ・ガアブレル』、『幼きアイオルフ』は、共に三十六時間である。『蘇生の日』に至つては、幕と幕との間に場所の移動があり、殊に第一幕と第二幕との間には、其重立つた人物が長途の旅をして居る。『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』は、僅かに三時間で済む。此脚本は幕こそ分たれてゐるが、實際においては、少しのボオズもない、極度まで切詰められた芝居であるから、普通、英米の劇場でするやうに、二幕目毎に道具を換へられると、頗る不自然のやうな氣持がする。其處へ行くと、我國及び獨逸の芝居のやうに、始めて廻り舞臺の必要を感じるのである。場所の統一に就ては、最早くだしく言ふ必要もあるまい。史劇の歴史的背景を要するは、言ふ迄もない事であるが、近代劇の中でも社會劇は、特に室内劇といふ別名を冠せられる程、それ程多く室内を用ゐて居る。『ヘッダ・ガアブレル』等も、將に此種類に屬するもので、最初より最後まで、一部屋で通して居る。

茲にイブセンの作物全體を通じて、面白い一つの現象がある。それは、一つの作物毎に、一つ或は二つの、非常に意味の深い言葉を利かせて、それに其作の主な性格がもつて居る、大きな哲學を含めてある事である。此等の言葉は、果して、其作全體の腹案が成立した後に、始めて按じ出されたものか、或は此等の言葉が思付いた後に、それに附隨して作物の考案が成立つたのか、それは作者自身の告白を聞かない間は、容易に判断し得ない所であるが、兎に角、此等の言葉は作者の智的傾向を知るのには、此上もない光明である。『皇帝とガリリアン』の「第三帝國」。『人形の家』の「奇蹟」。『再生』の「生の喜び」。『人民の敵』の「結盟した群衆」。『青年團』の「局部の位地」。『野鴨』の「理想的要求」。『ロスマアスホルム』の「幸福な貴人」。『海よりの夫人』の「意志の自由に於て」と「其人自身の責任を以て」。『幼きアイオルム』の「人間の責任」と「變化の法則」。『叛逆人』の「親切な考」。『ブランド』の「兎に角」。『ペヤ・ギント』の「汝に真であれ」。『汝自身に満足せよ』。『廻り途』。『社會の礎』の「理想の旗」。『海よりの夫人』の「郷に従ふ」。『野鴨』の「生を與へる偽り」。『ヘッダ・ガアブレル』の「葡萄の葉を頭に載せて」と「美事に死ぬ」。『建築師』の「塔のある家」。『ボルクマン』の「死に當る罪」。などは、總てそれである。オットオ・ヘルレルは、此等の言葉を、ワグネル式のオペラに於ける、"Ichmott"に當ると言つて居るが、意を得た言葉だと思ふ。最も

『ヘツダ・ガアブレル』の「葡萄の葉を頭に載せて」は、茲に出るのが始めてではない。既に『ベヤ・ギント』の中に、「私の身の周りに、葡萄の葉があるならば、私はそれを頭に巻いて、囁きませう」といふ句もある（一九〇八年、紐育スクリブナー出版のイブセン全集、第四卷、一六五頁、参照）。併し此場合に在つては、『ヘツダ・ガアブレル』のそれ程、有力用ゐられては居ない。のみならず、全體の思想のキイ・ノートにはなつて居ない。

五

批評家の中には、作物を観るのに、突込んでみないで、極て大まかに片附けて可ふ人がある。一體なら此片附けるといふ事は、突込んで観る事以上に、むづかしい筈であるのに、それが往々首尾轉倒されて、徹底しない觀察の上に築き上げられた、片附主義の空論がかなり多い。吾人はさういふ評論を、注意して見分けなければならぬ。イブセンの作物に對する批評の中にも、それがある。『ヘツダ・ガアブレル』も、無論さういふ災難を免れなかつた。

イブセンが、其作物を通して現はさうと努めた主義または理想は、縦しどうあらうとも、彼の

性格描寫の態度は、常に世人の豫想する所のものよりも、餘程客觀的のものであり、且つ深く研究されたものである事を、忘れてはならない。故に彼の描いた性格は、たとひそれが全然寫實的のものでない迄も、只二三の抽象的形容詞を以て、形容され得るほど、單純なものでない事を、記憶せねばならぬ。況んや彼が描いた所の性格の多くは、兎に角、一つの纏まつた倫理觀と哲學觀をもつた、中年の男女たるに於ては尙ほの事である。のみならず、イブセンは、一種の厭世家である。厭世家は、循俗的の氣分に觸れることが出来ても、自らそれに全人格を没脚する程の勇氣はもつて居ない。此點から考へても、イブセンの所謂「離れた態度」があきらかになるであらう。「離れた態度」を以て、抽象的思想に肉をつけるといふ論評には、余は敢て意見を挿まない。併し乍らさういふ事をいふ人々に對つては、反問したい事が二つある。イブセンは果してそれ程、遊戯的の氣分を弄び得る性格の人であつたか、果してそれ程、デレツタンリズムに囚はれた人であつたか、といふ事が其一。イブセンは果してそれ程、抽象的の實在にのみ興味をもつて、此複雑な現實を、單純な解釋の下に置かうとした人であるか、といふことが其二である。最も一般から言うて、後期の作物には、大分象徴的のものが多し。けれども其中に出て來る人物の性格には、驚くべき程の變化がある。故に到底單純な眼だけで、觀る事はどうかと思ふ。

余は此説明をもう少し徹底させる爲に、パウエル・グラナムマン教授のイブセン性格觀を擧げた
 と思ふ。彼はイブセン通として、世の凡ての人から許されて居る人である。が其人の言葉に、
 『ノラは、強烈な、個人主義の女を代表する。典型であり。アルヴキング夫人は、逆境を變じて
 順境とする、腹の善い馴化主義の人である。ストックマンは科學的唯心論者。ヘツダ・ガアブレ
 ルは、意志の強い、自尊心の多い、貴族主義者。ボルクマンは、建設的の精力主義者。ゾルネス
 は、自分に技倆がなくとも、其缺點を蔽すために、主義を擇ばないで事をする、自負心の多い努
 力主義者である』とある。結局、これは典型的の性格描寫といふ、古い演劇作法の規矩を、イブ
 センの近代劇に、當はめて見たので、一見要を得て居るやうに見えても、其實は頗る曖昧な斷定
 である。イブセンの作物には、始めより或格段な社會を代表したのもあり、又は各々理想、主
 義、信仰の違つた性格が、殆んど同じ水平線上に並列されてある事もある。故に此脚本は、かう
 いふ主義、あの脚本は、あゝいふ思想と、片端しから片附ける事は、隱當でない。殊に『ヘツダ・
 ガアブレル』に在つては、絶對的に避けねばならない。

獨逸系統の學派を承けた、オットオ・ヘルレル教授は、更に甚だしい片附方をして居る。彼の
 説に據れば、『イブセンの描いた性格は各々明瞭なるスタンプを押されて居る。而して其典型は

少くともそれが現存する以上は、純然たる個人的の状態と特色との漲りの中に蔽されて居勝ちで
 ある。然し乍ら、それらの性格の道德的性質と、彼等の關係して居る職業との間には、何等かの
 交渉が付いて居る。而してイブセンの同情と曲解とは、甲の仕事をして居る者と、乙の職業をも
 つて居る者とに對して、夫々違つた表現を示して居る』とある。而して彼は其例證として、次の
 やうなものを集めて居る。

普通の職業の中では、醫學に關した者が、イブセンから最も善い待遇を受けて居る。『海より
 の夫人』中の、ドクトル・ワンデル。『建築師』中の、ドクトル、ヘルダアル。『青年團』中の、ド
 クトル、フキイルドボオ。『人形の家』中の、ドクトル、ランク。『野鴨』中の、ドクトル、レル
 リング等は、凡てそれである。

教師と學者とは少々複雑であつて、『海よりの夫人』中の、アアンホルム。『幼きアイオルフ』
 中の、アルフレット・アルマアス等は、比較的尊敬を受けて居るが、『ヘツダ・ガアブレル』中の
 ゲオルゲ・テスマン。『社會の礎』中の、レエルント。『ロスマアスホルム』中の、クロオル等は
 これと反對に侮辱されて居る。但し『ヘツダ・ガアブレル』中の、レヨウボルクと、『ロスマアス
 ホルム』中の、ブレンデルとは、これらの何れにも屬して居ない。女教師の特に叮嚀に取扱はれ

て居る事は、『社會の礎』中の、マルタ・ベルニツク。『人民の敵』中の、ベトラ・ストックマン。『幼きアイオルフ』中の、アスタ・アルマアス等に徴しても、明瞭である。

法律家に對しては、絶對的の厭忌が示されて居る。『人形の家』中の、ヘルマア。『ヘツダ・ガアブレル』中の、ブラック。『戀のおかしみ』中の、ステンヌガアルド等は、其好例である。

牧師は、更により多く嫌はれて居る。『戀のおかしみ』中の、ストロオマン。『再生』中の、マシデルス等は、即ちそれである。更に普通一般の牧師といふ者は、『野鴨』中の、モオルヰキツク。『ブランド』の主人公、ブランド等に徴しても、彼等が社會に無用の人間の如く、取扱はれて居る事が分る。

政治家及び新聞記者は、更に殘酷な評價をつけられて居る。前者の例としては、『ロスマアスホルム』中の、モルテンスガアルドを擧ぐべく、後者の證據には、イブセンが解剖云々に就いて語つた諷刺の中に、『科學者をして無暗に動物を苦しめ死に到らしめるのは宜しくない。寧ろそれよりは、醫家の解剖の實驗に、新聞記者や政治家を使はした方が善い』というたのを見ても、容易に想像され得るであらう。

成程、かういふ歸納的研究法は、例證が多く擧げられ、ば擧げられる程、それだけ興味も多

く、且つ俗耳にも入り易い所から、何の氣なしに同感させられる事がある。併しもう一步踏込んで考へて見ると、此歸納的嗜好論は、若し文法に於ける法則の如くに、除外例を作る事を許さるゝならば、單にイブセンの作物からばかりでなしに、大多數の近代劇作家の作物から、其例證を擧げ得る性質のものである。のみならず、作物の上に現はれた人物描寫の精粗を以て、其作者の嗜好を判断するならば、古典劇、神秘劇、象徴劇等の作者は別として、現實の問題に興味をもつ所の、近代劇の作者は、常に非常な誤解を受けざるを得ない。故に余は、かういふ説に、あきたらなく思ふのである。

六

『ヘツダ・ガアブレル』の輪廓も、大體これで莫然ながら形が出来たから、今度は愈々其性格論に入るべき順序であるが、其前に一寸、此『ヘツダ・ガアブレル』の背後を流れて居る、其頃の時代思潮を一瞥して見たいと思ふ。其頃の諾威は、一つの言語的變化と、一つの政治的變化とを經て來て、『四世紀の夜』の眠りを醒ました黎明の國である。一つの言語的變化とは何であらう。

最初ノ威が丁抹から分離した際には、此兩國の國語の間に大した相違がなかつたので、當時の文學者は、單にイブセン獨りに限らず、ビヨルンソン、ライ、キイランド等はいふ迄もなく、多くの人々が、丁抹化された諾威語を用ひて居た。それは恰も、今日我國の若い人々が、翻譯化された日本語、または日本化された英語をいふのと、同じ状態に在つたのである。けれどもこれは、スカンデナヴィアの合併を期待して居た、所謂新しい人々の話であつて、其反面には、諾威の獨立を毀けまいとする、舊い人々があつた事は、説明を待たずして推測がつくであらう。それらの人々に據つて鼓吹された、國語改造の「Landsmaal」運動（古代スカンデナヴィア語に基いて新しい獨立の國語を作る）も、亦非常な勢ひであつて、一九一二年の今日に至つても、尙ほ依然として、「Maalstræve」運動といふ名の下に、同じ運動を繼續して居る。かういふ國語の過度期に生れたイブセンは、さるまごろつかしい國語改造運動などには組せず、自由な諾威語を以て、直截的に自分の思想を言ひあらはす事につとめた。故に『ヘッダ・ガアブレル』も丁抹人にいはせると、人物其物は純然たる諾威氣質であるけれども、其言語の與へる印象は、恰も自國の言葉を聞くやうで、實に名狀し難い懐しきをもつて居る、と云うて居る。一つの政治的變化とは何であらう。一八一四年、諾威はこれ迄幾度か企て、は失敗して來た獨立を、恰度此年の五月十七日と

いふに、再び宣告した。而して永久に丁抹から分離し、且つ組織的の法令を布き、平等の權利の下に瑞典と結び、新しい相互的君主政治を樹立したのである。是が即ち其頃の最も大なる政治的變化であつて、それ以來色々小さな運動が開始されたが、いづれも具體的に纏まつたものは、ないやうである。かくして「四世紀の夜」の眠りから醒めた諾威國民は、傳説を棄て、階級制度を破壊し、其處に新進氣鋭の、一大共和政治が敷かれた。元來、諾威人は、精力主義の、進取的な國民である。而して彼等の智的生活は、明かに其根底を、純理主義に置いてあるから、従つて其處には、功利主義に傾く危険が伴つて居た。だが、彼等の功利主義は、其鋭い精神上の欲望によつて調和されて居たが爲に、さる卑むべき傾向は遂に頭を上げる事が出来なかつた。のみならず彼等は道德的觀念に於ても、決して缺けては居らなかつた。で此理想主義に基いた、實際的の觀念と、彼等の風土氣候等に據つて鍛上げられた、絶大の努力主義とは、彼等をして最も純潔なるチュウトン種屬の性格を、最も鮮明に現せしめて居る。とはいふもの、他の一面に於ては、全然功利主義に囚はれた、デガダン肌の男や、只すら現實主義のみを便りとして、暗がりに佇むなごも、少くなかつた事を、記憶せねばならぬ。

諾威はオオソダックスの國である。彼等の深遠な智識も、亦其鋭敏な理解も、此眼に見えざる

鐵の鎖によつて、どれだけ阻害されたであらう。ブランドスは其著書の何所かに、『諾威人は正教を奉ずる人民であるが故に、イブセンを解する事が出来ない』と云うた事を、記憶して居る。またイブセン自身も、『神學の研究は、高等なる智識に、害がある』と云うて居る。かゝる混沌たる過渡時代には、其處に幾多の矛盾が横つて居るのは、當然の話である。これらの矛盾は、到底在來の『運命劇』などには、盛る事の出来ない題材である。茲に於てか、イブセンは始めて、『社會劇』なる者を創めたのである。ブランドスは、イブセンが現代生活の中より見出した問題を四つに分類して居る。第一は、宗教に關する問題。第二は、過去と現在との衝突。第三は、社會的生活であつて、富者と貧者、獨立者と依屬者。第四は、社會的と色情的との關係を通して觀た男女、女子の解放等になつて居るが、何れも過渡時代に於ける、思想の矛盾衝突から、起つて居ないものはない。

『ヘツダ・ガアブレル』は、少くともかういふ時代の産物である。余は何が故に、世人が徒らにイブセニズムのみを高調して、此作者がこれらの矛盾に對してもつた、いたましい情緒を味はなしかを頗る不審に思ふ。それと同時に、何故に、『ヘツダ』以外の彼が作物が、凡て問題劇扱ひにされて居るかを、怪むのである。余は社會問題の提供者、または解決者としてのイブセンより

も、人生の眞に觸れんと努めた、イブセンの心事をなつかしく思ふ。

七

余は、『ヘツダ・ガアブレル』の性格を研究するに當たつて、全然余の立脚地を、それらの性格と同じ平面上に於て、考究して見たい。試みに諸批評家のこれに關する性格論を讀んで見るのに、一人の人物のもつて居る性格と、他の一人の人物のもつて居るそれを比較して、其間の人格の輕重を問うたり、徹頭徹尾、評家自身のもつて居る道德觀を以て、徒に善惡の縛めをかけたりにして居る（千葉鞠香氏譯、『ヘツダ・ガブラア』小引参照）。かくの如きは、要するに、幻想家、Visionär、戰士、Kämpfer、唯心論者、Idealist としてのイブセンを、先入觀念にもつ所のものではあるまいか。併し一步退いて考へて見るのに、これらの批評家は余がいま茲に『ヘツダ・ガアブレル』の性格を論ずる場合とは違つて、少くともイブセンの名作數編を通じての觀念を語つて居るのであるから、勢ひさうした態度に出なければならぬのであらうと思ふ。故に余は、一概にそれらの批評を棄てやうとは、思はない。唯だ余の欲する所は、さういふ "prejudice" から

離れて、只單に“dramatis personae”の屬性“Attributum”を列擧するばかりでなく、もう少し内面的の觀察をして見たいのである。

ヘツダは、ガアブレル將軍の娘であつて、テスマンの妻君である。將軍は其夫人の没後、男やもめで通した位の人であるから、餘程嚴格な人でなければならぬ。尙ほ軍人など、いふものは、一體なら華美な生活を送つて、多少内富であらねばならぬのに、將軍の遺産としては、バアナアド・シヨウが“symbol”に使つた、例の一對のピストル以外には、他に大したものとても無かつたのである。して見れば、將軍は嚴格な人であると同時に、清廉な人でなければならぬ。而してかういふ氣質の人は、兎角自己の意志を曲げて、己れの周圍に同化する事は、出來難いのである。故にガアブレル一家の交際範圍といふものは、極めて狭小なものであつたと、考へねばなるまい。況して、一家の交際に油を灑ぐべき夫人の、此世に在らざるに於ては、其寂寞さ加減も、轉た思ひやられる。將軍亦没して、其跡に空しく遺されたヘツダは、徒らに空閨を守るべきものではなかつた。何人が己れを保護して呉れる人を、見出さねばならなかつた。而して其撰擇には極めて狭い範圍内から、テスマンが撰ばれたのである。此時のヘツダの胸中には、恐らく觀照の餘裕がなかつたらうと思ふ。それは、世間の結婚といふものが、外面的には非常な嚴重を以てせ

られても、内面的には案外締りのないものであるからである。かくしてヘツダ・ガアブレルは登記上、ヘツダ・テスマンになりはなつたが、ヘツダの心にはテスマンの感化よりも、ガアブレルの血の方が多かつた。此根本的特質を高調する爲に、作者イブセンは、此脚本に「ヘツダ・ガアブレル」といふ、表題を付けたと斷つて居る。嚴格であり、清廉であり、自己を尙ぶヘツダの心には、尙ほもう一つ、まだ自分の知らない現實に觸れてみたいといふ好奇心と、此狭められた繩張以外に飛出して、もう少し廣い、もう少し自由な世界に生きたいといふ社交性とが、潜んで居た。此心理状態は、恰度ズウデルマンの「故郷」に於けるマダダの心持であつて、將軍ガアブレルの存命中は、恰もマダダに對するシユワルツエを聯想させる。

幼時のヘツダは、男性的であつて、且つ非常に嫉妬深い女であつた。母の愛の如何なるものか知らなかつた彼女は、また家庭に於ける愛をも知る事が出來なかつた。唯だ彼女の知れるものは、彼女自身の存在と、其存在を守る、社會的制裁の武器なる禮節とのみであつた。故に彼女の存在を毀け、彼女に對する禮節を紊すものは、其人の何人たるを問はず、常に彼女のさし向けるピストルの的たらざるを得なかつた。フランク・ムウア・コオルビイは、「若し人殺しが社會の眼から觀て立派なものだといふ事であつたら、ヘツダは其良人をも殺したがつかも知れない」と

いひ、また『彼女は姦淫を悪事とは思はなかつた。唯それを無禮だと考へたまでの事である』と
いうて居る。これは少々誇大し過ぎた言ではあるが、それでも尙ほ一部の眞理は、含んで居るや
うに思はれる。ヘツダの嫉妬深かつた事は、もとテヤが彼女と同じ學校に通つて居た頃、其髪
毛が彼女自身のそれよりも、僅かに豊富であり、而して美しかつた故を以て、其毛を焼いて了は
うと恐迫した事があつたのでも分る。

かうした單純な信仰を有つて居たヘツダも、此複雑な現實の世界に對しては、大いに疑を懷か
ねばならなかつた。彼女の智識欲の向上して行く前には、本能の要求、罪惡の觀念、其他種々雜
多の問題が、横はつて居た。彼女は、それらの疑問に對つて、何時でも不審の耳をそばたてたば
かりでなく、其解決の爲めには、随分危険な經驗をも敢てした。併し乍ら、それは彼女の心的傾
向のみで、肉體上の清廉は、何時も安然な地位に置かれた。其理由は、彼女の自己を持する事が
高かつたからである。要するに、彼女は頭で罪惡を續けて來た、一人の "demi-vierge" であつた。
此遺傳的に殖付けられた個人主義と、偽らざる自己の本能から起る欲望との板ばさみになつた
ヘツダには、其何れをさるべきかといふ、確信をもつだけの勇氣がなかつた。それは、さういふ
確信を有つ爲には、餘りにセンチメンタルであつたからである。唯だ彼女の行くべき道は、さう

いふ曖昧な信念を、現實以外の世界に置いて、ロマンチックな色彩をほどこされた、肉慾を離れ
ての愛 "Platonic love" の中に、満足を見出すより外はなかつたのである。此愛情の畧にかけら
れたのが、即ちアイレルト・レヨウボルク其人である。

八

アイレルト・レヨウボルクがヘツダを知つたのは、將軍ガアブレルがまだ在世中の時であつた。
彼はある日の午後、ガアブレル將軍が書見に耽つて居る間に、此智識と經驗とに飢ゑて居るヘツ
ダの、奇妙な質問に應へたのである。ヘツダは、斯る質問を發する事を、罪惡とは思つて居な
かつた。何故なれば、彼女の要求して居た所ものは、肉慾を離れた、美しい愛、一少くとも、彼
女の眼から見ては、一に外ならなかつたからである。然るにレヨウボルクは、斯る質問に對して
一々詳しくして親切な答へを與へるほど、ナイイヴな男であるが、現實に生きん事を求めるレヨ
ウボルクの思想と、現實に生くるには餘りに内省的なヘツダの思想との間には、自ら其所に喰違
ひを生じた。此二人の思想は、或る一部分に於て相合しても、他の一部分に於ては、絶對的に相

容るゝ事が出来なかつたのである。所がレウボルクは、其瞬間の自分の氣持を、其儘に曝露し
 さうな態度に出た。此場合に於てヘツダの取るべき態度には、唯二途しかないのである。即ち彼
 女は既に、レウボルクと相語る事に於て、彼と自身の本能を満足させて居たのだから、而して
 それを罪惡と思つて居らなかつたのだから、若し此關係を斷つとすれば、それは彼女自身と彼レ
 ヨウボルクに向つて、人情の上から罪を犯す事となり、若し此關係を持続して行つて、何等かの
 具體的結果をもたらすならば、それは社會的の理想から觀て罪惡となる。何方に向いても罪で
 ある。さればといつてレウボルクの戀は、自分の豫想した程、奇麗な、而して眞面目なもので
 なかつたから、仕方なしに、ピストルを以て、レウボルクを放逐した。シヨウは此行動を目し
 て、『自然の貞操をもたぬ女の、本能的防禦だ』と言つて居る。

此場合にレウボルクの受けた損害は、彼にどれだけ之感傷を與へたであらう。余の考へる所
 では、恐らく大したものではなかつたと思ふ。といふのは、つまり、レウボルクは現實主義の男
 であつて、其利那々に自分のもつて居る才能の、最大極限を發揮すれば、それで満足するたち
 であるから、自分のベストを盡したといふ自覺さへ得れば、其結果の如何には、餘り執着しな
 かつたらうと思ふ。即ち飽らめの早い男である。而して此飽らめの早いといふ事は、現實主義の根

底を形作つて居る一つの要素で、また同時に近世デカダンスの一大特徴である。これあるが爲に
 デカダンスの徒は、悶死せずに生きて行かれるのである。併し乍ら其飽らめも亦、刹那的のもので
 あつて、一つの飽らめが付くと、其跡へは復た一つの不安が来る。斯くして近代人は、一つの不
 安から他の不安へ、動搖常なき日を送迎へし乍ら、尙ほ且つ生其物に嚙付いて居るのである。故
 に、イブセンを論ずる諸批評家の如き、理想のある人間より觀る時は、輕薄人、虚言者、まやか
 し者、弱虫と見えるのは、寧ろ當然の話である。

ヘツダにピストルを以て敬遠されたレウボルクは、其後如何なる行動を取つたであらうか。
 彼はヘツダに關する記憶を酒盃の裡に棄て、相變らず不安の世界を、あてごもなく浮草のやう
 にさ迷ふのであつた。其間に彼は、自分の受持であつた所の文明史の講坐も失ひ、シエルフ・エ
 ルヴステットといふ一官吏の家に、家庭教師をつとめる身となつた。エルヴステットは、數人の
 子供をもつた鰥夫であつた。彼は其子供の爲に一人の女教師を備つたが、一つは手廻りの不自由
 な事と、もう一つは經濟的であるので、遂に其女教師を娶つた。其女教師は、彼が結婚の申込
 を斷るには、餘りに貧乏であつた。故に此結婚は、もとより金の結婚であつて、精神上的結婚で
 なかつた事は、明瞭な話である。併し此エルヴステット夫人は、順良な氣質の女であつて、よく

己れを其周圍に適合さして行ける人であるから、夫と彼女との關係は、割合に圓滿にいつて居らしい。若し其間にレヨウボルクといふ者が、現れて來なかつたならば、恐らく後まで圓滿にいつた事であらう。併し彼女には一種の意地 "heroic spirit" があつた。物質的になり、或は精神的になり、自分の勢力の幾分でもが、他人の上に灑がれねば、満足が出来なかつた。それには彼女の良人は、年輩の相違といひ、從來の關係といひ、自分の意地をみせるだけの餘裕をもつて居なかつた。そこで彼女の意地が、レヨウボルクの上に向けられたのは、理の當然であつて、レヨウボルクも亦、さういふ女から慰めを受けるには、頗る適當の人物であつた。彼はその荒み果てた彼の情緒を露ほすところの慰めなら、何人からでも喜んで受けるのである。現に自分の競争の敵手なるテスマンの贊辭でさへも、心から喜んで聞くほどの人間である。其間に何等の打算も、何等の氣遣ひももつて居ない。自己の不安に對しては、随分複雑な苦痛を感じて居ながら、他人に對しては意外に單純である。

九

ヨウルケン・テスマンに嫁いだヘツダは、多少なりとも充實した生活を迎へて、何の途自分の運命をよい方に向けたい "faute de mieux" といふ抱負をもつて居たが、愈々嫁いでみれば、自分のこれまでもつて居た幻覺が、滅茶々に打壊されるのに、氣が付いた。死に瀕して居る叔母リイナといひ、これが介抱に一身を捧げて居る叔母ユリアアネといひ、日蔭に育つた草のやうに弱々しい下女のベルテといひ、ヘツダの眼から見れば、塵埃のやうに穢い人間に見える。彼等は凡て囚はれた人間である。個性の尊さを知らない人間である。ヘツダはさういふ人間と妥協するには、餘りに懸隔が大きかつた。ヘツダは遂に彼等を輕侮せずには、居られなかつたのである。こんな火もない水もない、まるで死灰のやうな家の中に在つても、尙ほ幾何かでも自分を解して呉れる人がないでもあるまいといふ事は、ヘツダが其良人テスマンに豫期して居た所であつた。然るにテスマンは、己れのもつて居る貧弱な、而して偏つた智識を以て、一家の幸福を形作る手段だと信じて居る、一種の實際主義者 "pragmatist" であつた。彼はヘツダの反抗的態度を以て彼女の智識の足りない所から來る結果であると考へて居た。それ故彼は機會のある度毎に、彼女を教へやうと努めた。「考へても御覽よ」といふ言葉は、此意味から言うて實に適切な表白だと思ふ。併かしテスマンのもつて居る智識の全量は、重に形而下に屬したもの、斷片的智識であつ

て、嘗にヘツダの心を見徹す力がなかつたばかりでなく、己れを統一する力さへも與へられなかつたのである。であるから、己れの信仰を他人に強いる事が出来ないうで、唯だ自己と他人との調停を謀るに過ぎない。其調停がヘツダに對する時は、降伏ともなり、御機嫌取りともなつて、遂に彼女の膝下にひれふす、意氣地のないお人好しとなるのである。かゝる智識の囚れ人、其縛めを破つて自己を表現し得るだけの勇氣のない男は、どうしてヘツダの満足を買ひ得るであらう。ヘツダは恐らく、かういふ事の出来ない人には、全く自己を没却して了つて、もう少し複雑な虚偽の世界に住む事を望んだであらう。ヘツダが、テスマンよりもブラック、ブラックよりもレヨウボルクを愛した、あの心理上の過程は、いくら味つても盡きない程の興味を與へる。

斯くの如くにして、ヘツダの家庭的な生活は、愛情といふものから次第に遠ざかつて、一日々々と冷たい、淋しいものになつて行くのである。彼女は妻として愛せられる事を嫌がつた。彼女は母となる事を恐れた。彼女は凡て責任を以て束縛される事から遁れやうと努めた。而して彼女は積極的の個人主義から離れて、全く消極的の個人主義に移つたのである。かうなれば、もはや、自分と他人との關係に就いて、其交情の濃淡を問ふ必要はなくなるので、全くの孤獨である。其處には最早、自分の眼から見て價値のない其良人を、恰度自分と同じ地位、またはそれ以上に、

引上げやうといふ努力はない。唯だ徒らに、自己を守り、自己を大きくしやうとする、新しい情緒のみが、働いて居るのである。此情緒の働き方が餘りに大きくつて、自然の範疇以外に超越して居る所を見て、或る評家は、『ヘツダ・ガアブル』を、喜劇だと断定するのである。併し乍ら自分だけは少くとも、もう少し自然に解して、矢張り、seriousな悲劇に見たい。兎に角ヘツダは、彼女のうつろな個性を、此種的情緒でいろいろつて、動搖恒なき發作的の行爲を續けて居る。其間に飛込んで來たのが、例の判事ブラックである。ブラックは年輩から云うても、經驗からいうても、此脚本の中に現れる誰よりも、一番豊富な人生哲學をもつた人である。彼は凡そ世の中の事は、何の鍵を打てばどんな音が出るといふ事を知つて居る。而して彼にはまた、どんな鍵に對しても、其鍵を打てるだけの用意が出来て居るのである。彼は自分の心持を人に覺られないやうに、獨りで方向轉換をやり得る人である。彼は眞當の自己の心持を自分の顔に出すといふ事を非常な恥辱に思つて居る人である。彼は世の中の凡ての鍵を利用、Einsamにせねば、氣が濟まないものである。ヘツダには、テスマン等よりは寧ろ、かういふ人の方が嬉しかつた。其所でヘツダは、逸早く、ブラックの提供した三角同盟、dreieckiges Verhältnisの中に入り、滅入つて了つた。其程の、其空虚な生活に、僅かに一縷の光りを投じて居るのである。ヘツダは意氣地のないテス

マンを見捨て、此不可解のブラックに對立し、それに對する反抗的態度の裡に、尙ほ幾分かの快感を求めつゝ、日を送るのであつた。

浮沈極りなき、數奇の生活をおくるレヨウボルクも、エルヴステット夫人の親切な仕打に勵まされて、元來好きな酒もたち、一冊の著述を公にしたが、幸に好評を博したので、其勢に乗じて此度は、社會文明史といふ大部の著述を完成した。エルヴステット夫人は、それを清書して手傳つたのである。茲でレヨウボルクは、一先づ安心した譯であるが、持つて生れた氣質は、どうしても一處に落付いて居る事を許さない。彼は遂にエルヴステット家を去り、前の出版物から入つた金を懐にして、再び都會の人となる。彼はエルヴステット夫人を嫌つたのでない、唯だ其緊張した愛情を、永久に同じ程度に持續する事が出来なかつただけの事である。エルヴステット夫人の意地は、どうしても其旗幟を鮮明にせずにはやまなかつた。彼女は其周圍にある凡てのものを振棄て、先づレヨウボルクの跡を追つた。而して第一番に彼を其酒癖から救出す爲に、非常線をテスマンの家に張つたのである。

+

エルヴステット夫人から、レヨウボルクの身上に就いて、逐一の話を聞いたヘツダは、再び彼が其疼ましい胸を抱き乍ら、彼女の許に其不安の念を披瀝しに來たのを見て、始めて現實の一端を洞察する事が出来た。而してこれまでの彼女の行爲が、凡て卑怯であつたといふ事も悟つた。併し乍ら、彼女は其空虚な個性を、今更の如く現實に適應させる事は、出来なかつたのである。それは其個性が統一のある理性の上に築かれたものでなくして、唯だ先天的にもつて生れた、一種の感覺の變化したものに過ぎなかつたからである。

「ヘツダ・ガアブレル」の作者は、茲に至つて始めて芝居を拵へて居る。即ちテスマンの友達なるレヨウボルクは、今やテスマンと大學教授の地位に就いて、鼎の輕重を問ふ場合になり、エルヴステット夫人の友達なるヘツダは、レヨウボルクに及ぼす女の勢力に就いて、今や敵味方の位置に立つて居る。波亂は波亂を呼び起して、遂に一大悲劇を構成する事になるのである。ヘツダは最早や一刻も猶豫する事が出来なかつた。何等かの方法を取つて、自分のレヨウボルクに對する勢力が、エルヴステット夫人のそれよりも、遙に力ある事を示さねばならなかつた。彼女の

レヨウボルクに對する愛情は、其反動として、エルヴステット夫人に對する嫉妬に變じた。彼女は其嫉妬の念を晴らすために、レヨウボルクをおだて、彼が最も誘惑され易い酒席に追出し、而してエルヴステット夫人の苦心を、水泡に歸せしめやうと謀つた。レヨウボルクは、案の如く彼女の畏にかゝつた。而して彼が酒の勢ひで、所謂、葡萄の葉を頭に戴せながら、彼がもつて居る才氣の翼を、思ふ存分に擴げて居る間に、彼は過つて大切な原稿を紛失したのである。テスマンは其原稿を拾つて、自宅にもち還り、それをヘツダに手渡す。原稿を拾上げたテスマンにも、レヨウボルクに對する嫉妬は、充分にあつた。併しながらヘツダの嫉妬と、テスマンのそれとの間には、大きな違ひがある。ヘツダの嫉妬は、何故に彼女がレヨウボルクを征服し得ないかといふ、自尊心から起つて居るが、テスマンのそれは、何故に彼がレヨウボルクほどの才能をもたないだらうといふ、羨望から來て居る。ヘツダは同じく嫉妬に驅られた身であり乍ら、尙ほ且つテスマンの心事を輕蔑もし憐れみもした。原稿を失つたレヨウボルクは、非常に失望したに相違ない。それは彼が才能を示す、唯一の武器であつたからである。ヘツダに對する戀も、エルヴステットに對する愛も、これに較ぶれば、何等の價值もなかつたらう。彼はかゝる女性を隨所に見出す事が出來るのであつた。けれども其原稿は、幾度も書ける性質のものでなかつたからである。

が更に一步退いて考ふる時は、彼は斯かる不幸に際して居ても、尙ほ其生の喜びを失ふまいと努めて居る事が分る。彼がエルヴステット夫人に對つては、其原稿を自ら裂捨てたといひ、ヘツダに對しては、面白もない處へ落したといふ其心理状態は、即ち彼が己れの嚮ふ局面に應じて其鋒先をかへ、飽く迄も生に執着する證據である。ヘツダは是に對して如何なる態度を取つたらう。

ヘツダは己れの計畫的かつたのを喜ぶと同時に、かく迄見じめな生活を送り乍ら、尙ほ現實に生きねばならぬレヨウボルクの心事を憐んだ。最初は畏におどしいれやうとした者が、今度は其反對に、彼の囚はれて居る運命の羈絆から救出さうと思立つた。其所でヘツダは、レヨウボルクに一挺のピストルを與へて、見事に死ねと忠告する。而して一方では、彼とエルヴステット夫人との間に出來た子供である所の彼の原稿も亦、火中に投じて焼き殺して了ふ。此際のヘツダの心情に關しては、諸家の説が随分まち／＼である。或人は徹頭徹尾、嫉妬心を以て解釋し、また或人は彼女のレヨウボルクに對する憐みの情を、もう少し色情的・eroticなものに解釋して居る。余は其いづれにも與したくない。余は彼女の同情が自然の行方から外れて、其所に彼女の個性を根底にした、一種の新しい感覺が湧いたものと考へたい。それが即ち彼女の現實主義を慕つて居乍ら、尙ほ浪漫主義から離れる事の出來ない原因である。

レヨウボルクは、無論ヘツダに對する約束を履行する事が出来なかつた。或は全然ヘツダの心事を了解し得なかつたのかも知れない。ブラックの賣した情報に據れば、彼は死ぬ間際まで生を樂み、且つ不面目な場所で不面目な死方をしたこの事である。功利主義のブラックは、此機會を利用して、ヘツダを己が掌中の者としやうとする。ヘツダは今や、單に自分の望み通りに、レヨウボルクを助ける事が出来なかつたばかりでなしに、自分も亦同じ生甲斐のない運命の民に懸つた事を自覺したのである。ヘツダの新しい感覺は、徒らに其度を高めるばかりであつた。彼女は其感情をピアノの鍵に洩し乍ら、私に決心の臍をかためた。其間に贖罪の悲みに満されたテスマンと、意地の強いエルヴステットは、燒棄てられた原稿の寫しを整理しかける。忽ち後の室に一發の銃聲がしたとおもつたら、ヘツダは其瞬間に、レヨウボルクに與へたのと對のピストルを以て、見事に額を貫いて死んで居たのである。ヘツダの矜りは縦しどんな形式を取らうとも、最後は矢張かうした死に終るべきものである。ブラックは、『世間の人は、さうはしないがなあ』といふ。功利主義、utilitarianismの英雄的行爲、heroic deedに對する嘆美の聲は、將にこの一語につくされて居る。これよりさきの性格の發展に就いては、色々の憶説を述べて居る評家もあるが、それはこゝで論ずる必要もあるまいと思ふ。

(一九二、一〇、一五)

附

録

附 録

附録の第一。ヘツダ・ガアブレルの研究

を主眼とせるイブセン文學の書目。

- A. 著作年表。
- B. 書目解題書。
- C. 著作全集と書翰集類。
- D. 翻譯。
- E. 評傳及び評論。
- F. 病理學及び生物學上よりの研究。
- G. イブセンの婦人解放問題に對する關係。
- H. 定期刊行物のイブセン特別號。

附録の第二。舞臺上に於けるヘツダ・ガ

アブレル。

- A. 歐米に於ける興行年表。
- B. 倫敦と紐育とに於ける名興行役割。

APPENDIX I.

Some selection from Ibsen-literature, aiming chiefly to facilitate the study of "Hedda Gabler."

A. Chronological List of Ibsen's Dramas.

I.	Catilina	1850
II.	Kaempehöjen	1851
III.	Sankthansnatten	1853
IV.	Fru Inger til Oestraat	1855
V.	Gildet paa Solhaug	1856
VI.	Olaf Liljekrans... ..	1857
VII.	Haemaendene paa Helgeland... ..	1858
VIII.	Kaerlighedens Komædie	1862
IX.	Kongs-Emnerne	1864
X.	Brand	1866
XI.	Peer Gynt... ..	1867
XII.	De Unges Forbund	1869
XIII.	Kejser og Galilæer	1873
XIV.	Samfundets Støtter	1877
XV.	Et Dukkehjem	1879
XVI.	Gengangere	1881
XVII.	En Folkefiende... ..	1882
XVIII.	Vildanden... ..	1884
XIX.	Rosmersholm	1886
XX.	Fruen fra Havet	1888
XXI.	Hedda Gabler	1890
XXII.	Bymester Solness	1892
XXIII.	Lille Eyolf	1894
XXIV.	John Gabriel Borkman	1896
XXV.	Naar vie doede vaagner	1899

B. Bibliographies.

Halvorsen, J. B., Norsk forfatter-lexikon. Vol. III, nos. 22-24. Christiania, 1889.

— Bibliografiske oplysninger til H. Ibsen's Samlede Værker. Copenhagen, 1901 [Refer also to Samlede Værker].

Kildal, Arne, Chronological bibliography of Ibsen and the interest manifested in him in the English-speaking countries, as shown by translations, performances, and commentaries [pp. 121-222 of Henrik Ibsen, Speeches and New Letters. Boston, 1910].

- Biography of Henrik Ibsen. Bullen of Bibliography, Boston, v. pp. 35-37, 49.
- Carpenter, W. H., Bibliography of Ibsen, Bookman, v. I.
- Elliott, Agnes, M., Contemporary Biography, Carnegie Library of Pittsburgh, 1903. [Under "Ibsen"].
- Mullikin, Clara, A., Reading List on Modern Dramatists. The Boston Book Co., 1907.

C. Works.

- H. Ibsen, Samlede Værker. Med bibliogr. oplysninger ved J. B. Halvorsen. Nine vols., and vol. X; Supplementsbind med bibliogr. oplysninger ved H. Koht og anmaerkninger af C. Naerup. Copenhagen, 1892-1902.
- H. Ibsen, Samlede Værker. Mindendgave. Edited by Johan Storm, Copenhagen, 1906 f.
- Breve fra H. Ibsen, udgivne med inledning og oplysninger af H. Koht og J. Elias. Two volumes. Copenhagen, 1904.
- H. Ibsen, Efterladte Skrifter, udgivne af H. Koht og J. Elias. Three volumes. Copenhagen, 1904.
- H. Ibsens sämtliche Werke in deutscher Sprache. Durchgesehen und eingeleitet von Georg Brandes, Julius Elias, Paul Schlenther. Nine volumes. Berlin, 1898-1903 [Vol. X, suppl., (1904): Briefe, herausgegeben mit Einleitung und Anmerkungen von Julius Elias und Halvdan Koht].
- H. Ibsens Werke. Hersg. von J. Hoffory. Four volumes. Berlin, 1889.
- H. Ibsens gesammelte dramatische Werke. Four volumes. Leipzig, 1889 [See also the German translation under Reclam].
- H. Ibsens dramatische Werke, übersetzt von W. Lange. Two volumes. Berlin, 1899. [I. Gespenster.—II, Rosmersholm.]
- Nachgelassene Schriften, herausgegeben von Halvdan Koht und Julius Elias. Four volumes. Berlin, 1909.
- The Collected Works of Henrik Ibsen. Copyright edition. Edited by William Archer. Twelve volumes. New York: Charles Scribner's Sons, 1908 [Vol. XII (1911): From Ibsen's Workshop. Notes, Scenarios, and Drafts of the Modern Plays, translated by A. G. Chater, with introduction by W. Archer].

- Letters of Henrik Ibsen, translated by John Nilsen Laurvik and Mary Morison. London, Hodder and Stoughton, 1905; New York, Fox, Duffield & Co., 1905, and Duffield & Co., 1903.
- The Correspondence of Henrik Ibsen, the translation edited by Mary Morison. London, 1905. [The contents are identical with the preceeding edition of Laurvik-Morison.]
- Ibsen's Speeches and New Letters, translated by Arne Kildal. With an introduction by Lee M. Hollander and a bibliographical appendix. Boston: Richard G. Badger, 1910.

D. Translations.

German.

- Brand, Deutsch von J. Ruhkopf. Bremen, 1874; 1885.
- — von P. F. Siebold. Kassel, 1872; Frankfurt, 1880.
- — von A. v. Wolzogen. Wismar, 1877.
- Bund der Jugend. Deutsch von A. Strodttmann. Berlin, 1872; 1890.
- Catilina. Deutsch von H. Greinz. München, 1896.
- Die Frau vom Meere. Deutsch von J. Hoffory. Berlin, 1889.
- Gedichte. Deutsch von H. Neumann. Wolfenb., 1886; Leipzig, 1903.
- Gedichte. Uebersetzt von Ch. Morgenstern, E. Klingensfeld und M. Bamberger. Berlin, 1902.
- Gespenster. Deutsch von O. Zinck. Berlin, 1890.
- Hedda Gabler. Deutsch von E. Klingensfeld. Berlin, 1900.
- Die Herrin von Oestrot. München, 1877.
- John G. Borkmann. Berlin, 1897; 1898.
- Kaiser und Galilae. 2 Bde. Deutsch von P. Herrmann. Berlin, 1888.
- Klein Eyolf. Berlin, 1895; 1900.
- Komödie der Liebe. Deutsch von M. v. Borch. Berlin, 1889; 1897.
- Die Kronprätendenten. Deutsch von A. Strodttmann. Berlin, 1872.
- Nordische Heerfahrt. München, 1875.
- Peer Gynt. Deutsch von L. Passage. Leipzig, 1881.
- — En dram. Gedigt. In t' plattdüts verstaald döör B. Brons. Emden, 1899.

- Ein Puppenheim (Nora). Uebersetzt von M. Lie. Leipzig, 1904.
- Ein Puppenheim (Nora). Deutsch von M. v. Borch. Berlin, 1890.
- Rosmersholm. Deutsch von M. v. Borch. Berlin, 1887; 1890.
- Baumeister Solness. Deutsch von S. Ibsen. Berlin, 1893.
- — von V. Ottmann. Leipzig, 1893.
- Die Stützen der Gesellschaft. Deutsch von E. J. Jonas. Berlin, 1878.
- — von C. Klingensfeld. München, 1878; Berlin, 1890.
- Ein Volksfeind. Deutsch von M. v. Borch. Berlin, 1887; 1897.
- Wenn wir Toten erwachen. Berlin, 1900.
- Die Wildente. Deutsch von M. v. Borch. Berlin, 1887; 1897.
- Reclams Universal-Bibl. (Leipzig):—
- Ibsen, Baumeister Solness; — Brand; — Der Bund der Jugend; — Das Fest auf Solhaug; — Die Frau vom Meer; — Frau Inger auf Oestrot; — Gedichte; — Gespenster; — Hedda Gabler; — Kaiser und Galiläer; — Komödie der Liebe; — Die Kronprätendenten; — Nora oder ein Puppenheim; — Nordische Heerfahrt; — Peer Gynt; — Rosmersholm; — Die Stützen der Gesellschaft; — Ein Volksfeind; — Die Wildente.
- Meyers Volksbücher. (Bibl. Inst., Leipzig):—
- Ibsen, Die Frau vom Meer; — Gespenster; — Nora; — Rosmersholm; — Stützen der Gesellschaft; — Ein Volksfeind; — Die Wildente.
- Hendels Bibliothek der Gesamt-Literatur Halle:—
- Ibsen, H., Komödie der Liebe; — Gespenster; — Hedda Gabler; — Ein Volksfeind; — Ein Puppenheim (Nora); — Baumeister Solness; — Rosmersholm; — Die Wildente; — Die Stützen der Gesellschaft.

English.

- Brand. In English prose. Edited by William Wilson. London, 1891.
- — In English verse. Edited by F. E. Garrett. London, 1894.
- Doll's House. Ed. by Wm. Archer. London, 1901.

- A Doll's House. Transl. by Wm. Archer. London, 1892; 1897.
- — or Nora. London, 1893.
- Emperor and Galilean. Transl. by C. Ray. London, 1876.
- — Transl. by Wm. Archer. London, 1890.
- An Enemy of the People. Transl. by E. Marx-Aveling. London, 1897.
- Ghosts; Enemy of the People; The Wild Duck, etc. London, 1890.
- Ghosts. Ed. by Wm. Archer. London, 1901; 1897.
- — 1890.
- Gleanings from Ibsen. Selected and edited by O. Keddell and P. C. S. London, 1897.
- Hedda Gabler. Transl. by E. Gosse. London, 1891; 1898.
- John Gabriel Borkmann. Transl. by Wm. Archer. London, 1897.
- The Lady from the Sea. Transl. by E. Marx-Aveling. London, 1889; 1891.
- — Transl. by F. E. Archer. London, 1897.
- Lady from the Sea; Inger; Vikings; Pretenders. Edited by Wm. Archer. London, 1890.
- League of Youth. Ed. by Wm. Archer. London, 1901.
- League of Youth; Pillars of Society. Transl. by William Archer. London, 1890.
- Little Eyolf. Transl. by Wm. Archer. London, 1894.
- Love's Comedy. Transl. by C. H. Herford. London, 1900.
- Lyrical Poems. Selected and Transl. by R. A. Streatfield. London, 1902.
- The Masterbuilder. Transl. by Gosse and Archer. London, 1893; 1898; 1902.
- — Transl. by J. W. Aretander. London, 1893.
- Nora. Transl. by H. F. Lord. London, 1882.
- Peer Gynt. Transl. by Wm. and Ch. Archer. London, 1892.
- Pillars of Society. Transl. by H. Ellis. London, 1888.
- — Ed. by Wm. Archer. London, 1901.
- Rosmersholm. Transl. by L. N. Parker. London, 1889.
- Rosmersholm; Lady from the Sea; Hedda Gabler. London, 1891.

The Wild Duck. Transl. by F. E. Archer. London, 1897; 1905.

When We Dead Awaken. Transl. by Wm. Archer. London, 1900.

French.

Brand. Traduit par le comte Prozor. Paris, 1895.

Le canard sauvage; Rosmersholm. Traduit par le comte Prozor. Paris, 1891; 1900.

Catilina. Traduit par MM. de Colleville et F. de Zépelin. Paris, 1903.

La comédie de l'Amour. Trad. par le vicomte de Colleville et F. de Zépelin. Paris, 1896; 1903.

La dame de la mer; L'ennemi du peuple. Trad. de Ch. Johansen et A. Chennevières. Paris, 1892; 1899.

Empereur et Galiléen. Traduction par Charles de Casanove. Paris, 1895.

Un ennemi du peuple. Trad. par le comte de Prozor. Paris, 1905.

La fête à Solhaug. Trad. par de Colleville et Zépelin. Paris, 1903.

Hedda Gabler. Trad. par le comte Prozor. Paris, 1891; 1900.

Jean Gabriel Borkman. Trad. par le comte Prozor. Paris, 1897.

Lettres à ses amis. Trad. par Mme. M. Rémusat. Paris, 1906.

Madame Inger à Ostraat. Trad. par MM. de Colleville et F. de Zépelin. Paris, 1903.

Olaf Liljekrans; Le Tumulus. Trad. par de Colleville et Zépelin. Paris, 1904.

Peer Gynt. Trad. par le comte Prozor. Paris, 1899.

Le Petit Eyolf. Trad. par le comte Prozor. Paris, 1895.

Poésies complètes. Trad. par de Colleville et Zépelin. Paris, 1902.

Les prétendants à la couronne; Les guerriers à Elgeland. Traduction de Jacques Trigant-Geneste. Paris, 1893.

Quand nous réveillerons d'entre les morts. Trad. par le comte Prozor. Paris, 1900.

Les revenants; Maison de poupée. Trad. par M. le comte Prozor. Paris, 1889.

Les revenants. Trad. par Rodolphe Darzens. Paris, 1890.

Solness le constructeur. Trad. par le comte Prozor. Paris, 1893; 1899.

Les soutiens de la Société; L'Union des jeunes. Traduction de Pierre Bertrand et Edmond de Nevers. Paris, 1893.

Italian.

L'anitra selvatica. Trad. di P. Rindler & S. Milano, 1894.

Casa di bambola. Trad. di L. Capuana. Milano, 1894.

— — Trad. di P. Galletti. Milano, 1894.

Catilina. Trad. di P. Ottolini & P. Milano, 1902.

Le colonne della società. Trad. di P. Rindler & S. Milano, 1892.

— — Trad. di Savini. Milano, 1897.

La commedia dell'amore. Trad. di Ottolini. Milano, 1905.

Il costruttore Solness. Vers. di P. Rindler & S. Milano, 1893.

Dalle lettere per pallon. Vers. di G. Meoni. Firenze, 1903.

La donna del mare. Vers. di P. Rindler & S. Milano, 1894.

La fattoria Rosmer. Trad. di P. Rindler & S. Milano, 1894.

Gian Gabriele Borkmann. Trad. di M. Buzzi. Milano, 1900.

Hedda Gabler. Versione di P. Rindler & S. Milano, 1893.

Imperatore e Galileo. Vers. di M. Buzzi. Milano, 1902.

La lega dei giovani. Trad. di M. Savini. Milano, 1894.

— — Trad. di G. Oberosler. Milano, 1895.

Nemico del popolo. Trad. di C. Gabardini. Milano, 1894.

Il piccolo Eyolf. Trad. di E. Gagliardi. Milano, 1897.

I pretendenti della corona. Trad. di A. G. Amato. Milano, 1895.

Quando noi morti ci destiamo. Trad. di P. Ottolini. Milano, 1900.

— — Vers. di M. Buzzi. Milano, 1902.

La signora Inger di Oestrot. Trad. di P. Rindler & S. Milano, 1894.

Spedizione nordica. Trad. di P. Rindler & S. Milano, 1894.

Spettri. Milano, 1900.

Spettri. Vers. di P. Rindler & S. Milano, 1892; 1894.

Terje Vigen; in alto; poemetti. Trad. di M. Verno & M. Bari, 1904.

Spanish.

- Los aparecidos; Hedda Gabler. Madrid. Brand. Barcelona, 1903.
 Casa de muñeca. Barcelona, 1903.
 Comedia del amor; Los guerreros in Helgeland. Valencia, 1903.
 La dama del mar; Un enemigo del pueblo. Madrid. El pato silvestre. Madrid, 1899.
 — — Barcelona, 1903.
 Emperador Galileo. Valencia, 1903.
 Un enemigo del pueblo. Barcelona, 1903.
 Los Espectros. Barcelona, 1903.
 Los Espectros; Hedda Gabler; El maestro Solness. Valencia, 1903.
 Halvard Solness. Barcelona, 1902.
 Hedda Gabler. Barcelona, 1902.
 Los puntales de la sociedad. Barcelona, 1903.

E. Biographical and Critical Monographs.*Scandinavian.*

- Bergsøe, W., Henrik Ibsen paa Ischia og "fra piazza del popolo." Erindringer fra aarene, 1863-69. Copenhagen, 1907.
 Brandes, Georg, Björnson och Ibsen. Stockholm, 1882. In English, London, 1899.
 — — H. Ibsen. In Aesthetiske Studier, pp. 278-336. Copenhagen, 1888.
 — — Henrik Ibsen. Two volumes. Copenhagen, 1898.
 — — Det moderne Gjennembruds Maend. Copenhagen, 1883. In German, Moderne Geister, Frankfurt, 1882. Fourth edition, 1901. In English, transl. by R. B. Anderson, "Eminent Authors of the Nineteenth Century," pp. 475-566.
 Dietrichson, L., Svundne tider. Three volumes. Christiania, 1896-1901.
 Jaeger, Henrik, Henrik Ibsen og hans Værker. Christiania, 1888. In English, transl. by Clara Bell. London, 1890; also by W. Morton Payne, "H. Ibsen, 1828-1888; A Critical Biography." Chicago, 1890; In German "H. Ibsen, 1828-1888; Aus. d. norweg. übers." Dresden, 1890-2. Aufl.—1897.

- Lindgren, Hellen, H. Ibsen i hans livskamp och hans verk. Stockholm, 1903.
 Paulsen, J., Mine erindringer. Copenhagen, 1900 (pp. 1-40; mit første møde med Ibsen).
 — — Nye erindringer. Copenhagen, 1901 (pp. 80-157; Siste møde med Ibsen).
 — — Samliv med Ibsen. Nye erindringer og skitser. Copenhagen, 1906. In German by H. Kiy, Berlin, 1907.
 Petersen, S., H. Ibsens norske stillebog fra 1848. Christiania, 1898.
 Thaarup, H., H. Ibsen set under en ny synsvinkel. Copenhagen, 1900.
 Vasenius, V., H. Ibsens dramatiska diktning i dess första skede. Helsingfors, 1879.
 — — Henrik Ibsen. Ett skaldeporträtt. Stockholm, 1882.
 — — Henrik Ibsens tragedi et Dukkehjem. Helsingfors, 1888.

German.

- Aall, A., Henrik Ibsen als Denker und Dichter. Halle, 1906.
 Acher, M., Ibsens drittes Reich. Wien, 1900.
 Bahr, H., H. Ibsen. Wien, 1887.
 — — Premiären. München, 1902.
 — — Rezensionen. Berlin, 1903.
 Berg, L., H. Ibsen und das Germanentum in der mod. Literatur. Berlin, 1887.
 — — H. Ibsen. Studien. Köln, 1901.
 Berger, A. v., Studien und Kritiken. Wien, 1896.
 Brahm, O., H. Ibsen; Ein Essay. Berlin, 1887.
 Brandes, Georg, Ibsen. Mit zwölf Briefen an Emilie Bardach. Berlin, 1906.
 — — Gesammelte Schriften, IV. München, 1903. (See also under *Scandinavian*).
 Bulthaupt, H., Dramaturgie des Schauspiels, IV. Ibsen, Wildenbruch etc. Oldenburg, 1901.
 Diefke, M., Was muss man von Ibsen und seinen Dramen wissen? Berlin, 1904.
 Dresdner, A., Ibsen als Norweger und Europäer. Jena, 1907.

- Ehrenfels, Ch. v., Die Wertschätzung der Kunst bei Wagner, Ibsen und Tolstoi. Prag, 1901.
- Ernst, P., Henrik Ibsen (Die Dichtung 1.) Berlin, 1904.
- Garde, O., Der Grundgedanke in H. Ibsens Dichtung. Uebers. aus d. Dän. Leipzig, 1898.
- Goldschmidt, K. W., H. Ibsen. Berlin, 1901.
- Hans, W., Schicksal und Wille. Ein Versuch über Henrik Ibsens Weltanschauung. München, 1906.
- Harden, M., Literatur und Teater. Berlin, 1896.
- Hanstein, A. v., Ibsen als Idealist. Leipzig, 1897.
- Holm, O., Christus oder Ibsen? Alte oder neue Weltanschauung? Autoris. Uebers. aus d. norweg. Hamburg, 1903.
- Key, E., Die Wenigen und die Vielen. Berlin, 1901.
- Krebs, R., Das moderne realist-naturalist. Drama im Lichte des Christentums: Ibsen, Hauptmann, Suderman. Erfurt, 1897.
- Landsberg, H., Ibsen (Moderne Essays, 42.43). Berlin, 1904.
- Litzmann, B., Ibsens Dramen, 1877-1900. Hamburg, 1901.
- Lorenz, R., Moderne Regiekunst, entwickelt an Ibsens Gespenster etc. Halle, 1900.
- Lothar, R., H. Ibsen. Leipzig, 1902.
- Mauerhof, E., Ibsen der Romantiker des Verstandes. Halle, 1907.
- Mayrhofer, Johannes, Henrik Ibsen. Berlin, 1911.
- Münz, B., Ibsen als Erzieher. Leipzig, 1908.
- Normann, E., Henrik Ibsen in seinen Gedanken und Gestalten. Berlin, 1908.
- Odinga, Th., H. Ibsen. Ein Essay. München, 1882.
- Passarge, L., H. Ibsen. Ein Beitrag zur neuesten Geschichte d. norweg. Nationallitt. Leipzig, 1883.
- Paulsen, J., see under *Scandinavian*.
- Petsch, R., Ibsen „Brand.“ Eine Erklärung d. Werkes, zugleich e. Einführ. in d. Weltanschauung d. Dichters. Würzburg, 1902.
- Pick, R., Ibsens Zeit- und Streitdramen. Berlin, 1896.
- Plechanow, H., Ibsen. Stuttgart, 1909.
- Polonsky, G., Gewissen, Ehre u. Verantwortung. Literar.-psychol. Studien. (Ibsen, Gleb Uspenski. I. Tolstoi). München, 1898.
- Reich, E., H. Ibsens Dramen. Dresden, 1894. u. s. Aufl.
- Schäfer-Dittmar, W., Nora. München, 1895.

- Schmitt, E. H., Ibsen als psychologischer Sophist. Berlin, 1889.
- — Ibsen als Prophet. Grundgedanken einer neuen Aesthetik. Leipzig, 1908.
- Steiger, E., Das Werden des neuen Dramas I, H. Ibsen u. die moderne Gesellschaftskritik. Berlin, 1898.
- Stein, Ph., H. Ibsen. Zur Bühnengechichte seiner Dichtungen. Berlin, 1901.
- Strodtmann, O., Das geistige Leben in Dänemark. Berlin, 1873.
- Volger, F., Ibsens Drama „Nordische Heerfahrt“ und die alt nordischen Sagen. Altenburg, 1904.
- Witz, C. A., Baumeister Solness. Wien, 1900.
- Wolff, E. Sardon, Ibsen und die Zukunft des deutschen Dramas. Kiel, 1891.
- Woerner, R., H. Ibsens Jugenddramen. München, 1895.
- — Henrik Ibsen. 2 Bde. München, 1900-1910.

English.

- Boyesen, H. H., A, Commentary on the Works of Henrik Ibsen. New York, 1894.
- Brandes, Georg. see under *Scandinavian*.
- Gosse, Edmund, Studies in the Literature of Northern Europe. London, 1879, pp. 35-69. An enlargement of this book published under the title "Northern Studies," London, 1890.
- — Ibsen. London, 1907.
- Heller, Otto, Henrik Ibsen, Plays and Problems. Boston and New York, 1912.
- Henderson, A., Ibsen, in Interpreters of Life, pp. 159-283. New York, 1911.
- Herrmann, Oscar, Living Dramatists. New York, 1905. [The essay on Ibsen is by Henry Davidoff.]
- Huneker, James, Ibsen, in Iconoclasts, a Book of Dramatists. New York, 1905.
- — Henrik Ibsen, in Egoists, a Book of Supermen. New York, 1909.
- Jaeger, Henrik, see under *Scandinavian*.
- Lee, Jennette Barbour, The Ibsen Secret, A Key to the Prose Dramas of Henrik Ibsen. New York and London, 1907.
- Macfall, Haldane, Ibsen, the Man, His Art, His Significance. London and New York, 1907.

- Matthews, Brander, Ibsen, the Playwright, in *Inquiries and Opinions*, pp. 229-279. New York, 1907.
- Merejkowski, D., *The Life Work of Henrik Ibsen*. From the Russian, by G. A. Mounsay. London, 1907.
- Moore, George, Ghosts, in *Impressions and Opinions*, pp. 215-216. London, 1891.
- Moses, Montrose J., *Henrik Ibsen, The Man and His Plays*. London, 1898.
- Russel, E., and P. Cross-Standing, *Ibsen on His Merits*. London, 1897.
- Shaw, George Bernard, *The Quintessence of Ibsenism*. London, 1891; New York, 1904.
- Wicksteed, P. H., *Four Lectures on Ibsen, dealing chiefly with his metrical works*. London, 1892.
- Zanoni (*pseud.*), *Ibsen and the Drama*. London, 1894. [*hostile to Ibsen*].

French.

- Bigeon, Maurice, *Les révoltés scandinaves, (Brandes—Jonas Lie. — Björnson. — Strindberg. — Henrik Ibsen, etc.)* Paris, 1898.
- Brahm, A. de, *Critique d'Ibsen*. Paris, 1898.
- Colleville et Zepelin, *Le maître du drame moderne : Ibsen, l'homme et l'œuvre*. Paris, 1904.
- Doumic, R., *de scribe à Ibsen. Causeries sur le théâtre cont.* Paris, 1893.
- Ehrhard, A., *Henrik Ibsen et le théâtre contemporain*. Paris, 1892.
- Lasius, T., *Henrik Ibsen. Étude des prémisses psychologiques et religieuses de son œuvre*. Paris, 1906.
- Lemaitre, Jules, *Impressions de théâtre, V, VI, VII, VIII, IX*. Paris, 1892-1898.
- Leneveu, G., *Ibsen et Maeterlinck*. Paris, 1901.
- Lichtenberger, Henri, *Le Pessimisme d'Ibsen*. *Revue de Paris*, No. 84. (1901), pp. 806-825.; et *Revue des Cours et Conférences*, depuis 1899.
- Ossip-Lourié, *La philosophie sociale dans le théâtre d'Ibsen*. Paris, 1900.
- Prozor, Comte de, *le Peer Gynt d'Ibsen*. Paris, 1896.
- Radiguet, Lionel, *Points de vue Ibséniens*. Paris.
- Sarolea, A., *Henrik Ibsen. Étude sur sa vie et son œuvre*. Liège et Paris, 1891.

- Tissot, E., *Le drame norvégien. H. Ibsen, Björnstjerne Björnson*. Paris, 1893.

Miscellaneous.

- Anstey, F., *Mr. Punch's pocket Ibsen*. London, 1893.
- Bom, de, *Ibsen en zijn Werk*. Gent, 1893.
- Gran, Gerh., *Ibsen. Festschrift z. 70. Geburtstag (dänisch)* Bergen, 1898.
- Helweg, Björnson og Ibsen i deres to seneste Værker. Kjöbenhavn, 1866.
- Ibsenkalender, fodselsdagsalbum*. Kopenhagen, 1900.
- Sinding, Larsen, *Om Henrik Ibsen*. Christiania, 1889.
- Longo, M., *Schiller-Ibsen. Studi di psicologia penale*. Torino, 1902.
- Ruggieri, Enaico *Ibsen e gli spettri*. Palermo, 1897.
- Scalinger, G., *M. Ibsen. Studio critico*. Napoli, 1895.
- Schack, A., *En. Efterskrift om H. Ibsens digtning*. Kopenhagen, 1897.
- Schiavi, L. A., *Ibseniana : studio su Ibsen e le sue opere*. Roma, 1903.

F. Pathological and Biological Studies of Ibsen's Characters.

- Aronsohn, O., *Oswald Alving. Eine pathologische Studie [No. 1 des Erläuterungen zu Ibsens pathologischen Gestalten]*. Halle, 1909.
- Geyer, Dr., *Le Théâtre d'Ibsen*. *Revue Bleue*, XVI, 7 (1904).
- Gumpertz, K., *Ibsens Vererbungstheorie*, *Deutsch medizinische Presse*, X (1906), pp. 84 ff.
- Lombroso, C., *Ibsens Gespenster und die Psychiatrie*. *Die Zukunft*, IV (1892), pp. 551-556.
- Nordau, M., *Entartung*. Berlin, 1892.
- Sadger, J., *Ibsens Dramen. Aesthetisch-pathologische Studien*. *Beilage zur Allgemeinen Zeitung* (1894), nos. 162, 164-165, 229; (1895) nos. 140-141.
- Schiff, E., *Die Medizin bei Ibsen, [Aus dem wissenschaftlichen Jahrhundert, pp. 93-100.]* Berlin, 1902.
- Weygandt, W., *Die abnormen Charactere bei Ibsen*. Wiesbaden, 1907 [Separately reprinted from *Abnorme Charaktere in der dramatischen Literatur*, pp. 77-126].
- Wolf, G., *Psychiatrie und Dichtkunst*. Wiesbaden, 1903.

G. On Ibsen's Relation to the Emancipation Question.

- Albrecht, H., *Frauencharaktere in Ibsens Dramen*. Leipzig, 1902.
- Andreas-Salomé, Lou, *Ibsens Frauengestalten*. Jena, 1907.
- Bistram, Ottilie v., *Ibsens Nora und die wahre Emanzipation der Frau*. Wiesbaden, 1900.
- Boccardi, A., *La donna nell' opere di H. Ibsen*. Trieste, 1892.
- Brünnings, Emil, *Die Frau im Drama Ibsens*. Leipzig, 1910.
- Ende, von, A., *H. Ibsen and the Women of his Dramas*, Theatre, X, pp. 49-54.
- Gilliland, Mary S., *Ibsen's Women*. London, 1894.
- Hertzberg, N., *Er Ibsens Kvinde typer norske?* Christiania, 1893.
- Kretschmer, Elia, *Ibsens Frauengestalten*. Stuttgart, 1905.
- Marholm, Laura, *Die Frauen in der skandinavischen Dichtung*. Freie Bühne, I (1890), pp. 168 ff.
- Ibsen als Frauenschilderer. Nord und Süd, April, 1892.
- Ibsen-Heft der Neues Frauenleben. [Contributions by E. Holm, Leopoldine Kulka, Rosa Mayreder, etc.]

H. Ibsen-Numbers of Periodicals.

- Die neue Rundschau, XVII, (1906). [Contributors: Otto Brahm, Julius Elias, Hermann Bang, Bernard Shaw etc.]
- Bühne und Welt, 1903, no. 12.
- Propyläen, 1909, nos. 31-32, Ibsen-Nummer. [Contributions by Kalthoff, H. Lufft, P. Zschorlich].
- Sonderhefte der Ibsen-Vereinigung: Ibsen, Masken, II, nos. 21-22. [Contributors: Hermann Bahr, A. v. Berger, O. Brahm, G. Brandes, J. Elias, H. Landsberg, P. Schlenker, H. Drachmann, M. S. Conrad, E. Reich, etc.]

APPENDIX II.

Hedda Gabler on Stage.

A. Chronological List of the Performances on European and American Stages.

- I. München: Münchner Hoftheater. (Frau Conrad-Ramlo as Hedda; Ibsen was present).
.....Jan. 31, 1891
- II. Helsingfors:Feb. 6, 1891
- III. Berlin: Berliner Lessingtheater... Feb. 10, 1891

- IV. Stockholm:Feb. 19, 1891
- V. Kopenhagen: Königliche Theater. (Fru Hennings as Hedda)Feb. 25, 1891
- VI. Christiania: (Constance Brunn as Hedda: Ibsen saw the play on Aug. 28)Feb. 26, 1891
- VII. Rottendam:March, 1891
- VIII. London: Vaudeville Theatre. Apr. 20-24, 1891
- IX. Paris: (Fräulein Brandes as Hedda)
.....Dec. 17-31, 1891
- X. Rome:Sept. 18, 1892
- XI. Petersburg: (in *French*)1892
- XII. London:1893
- XIII. Manchester:1894
- XIV. Petersburg: (in *Spanish*)March, 1898
- XV. New York: Fifth Avenue Theatre (Miss Robins as Hedda)March 30, 1898
- XVI. Lissabon: (Frau Duse as Hedda)... April, 1898
- XVII. Moskow: ünstler TheaterFeb. 19, 1899
- XVIII. Christiania: Nationaltheater. Oct. 5-11, 1901
- XIX. Hamburg: Deutschen Schauspielhaus. ... 1902
- XX. New York: Manhattan Theatre. (Mrs Fiske as Hedda)Oct. 5, 1903
- XXI. Berlin: (Frau Duse as Hedda)
.....Feb. 13, 1905
- XXII. Wien: BurgtheaterMarch 20, 1905
- XXIII. Poland: 1905
- XXIV. Magyar: 1905
- XXV. Croatia: 1905
- XXVI. Berlin: Lessingtheater (Brahm as Hedda)
.....Sept. 14-Oct. 13, 1906
- XXVII. New York: Princess Theater (Mrs. Nazimova as Hedda) ... Nov. 13, 1906
- XXVIII. London: Court Theatre (Mrs. Campbell as Hedda)March 5, 1907
- XXIX. Berlin: Deutschen Theatre (Reinhardt as Artdirector)March 8-16, 1907
- XXX. Karlo-ruhe: HoftheaterMarch 22, 1907
- XXXI. Wiesbaden: HoftheaterApr. 8, 1907
- XXXII. Berlin: LessingtheaterAug. 12, 1907
- XXXIII. South America: (Frau Duse as Hedda)... 1907
- XXXIV. Wien: Carltheater (German stars and Duse)March 18, 1908

B. Some Famous Casts in London and New York.*London: The Vaudeville Theatre.*

(APRIL 29TH, 1891)

George Tesman.....	Mr. Scott Buist
Mrs. Hedda Tesman	Miss Robins
Miss Tesman.....	Miss Henrietta Cowen
Mrs. Elvsted	Miss Lea
Judge Brack	Mr. Charles Sugden
Eilert Lövborg	Mr. Arthur Elwood
Bertha	Miss Patty Chapman

N. Y.: The Fifth Avenue Theatre.

(MARCH 30TH, 1898)

Tesman	Leo. Ditrichstein
Hedda	Elizabeth Robins
Mrs. Elvsted	Maida Craigen
Judge Brack	William Courtleigh
Lövborg	Earnest Hastings

N. Y.: The Manhattan Theatre.

(OCTOBER 5TH, 1903)

George Tesman	William B. Mack
Judge Brack	Henry J. Carvill
Eilert Lövborg	Hobart Bosworth
Hedda Tesman	Mrs. Fiske
Mrs. Elvsted	Carlotta Nillson
Miss Tesman	Mary Maddern
Bertha	Bella Bohn

N. Y.: The Princess Theatre.

(NOVEMBER 13TH, 1906)

Mrs. Hedda.....	Mrs. Alla Nazimova
Tesman	John Findlay
Brack	Dodson Mitchell
Lövborg	John Blair
Miss Tesman	Mrs. Thomas Whiffen
Mrs. Elvsted	Laura Hope Crews
Bertha	Mrs. Jacques Martin

“Nam et ipsa scientia potestas.”

—Sir Francis Bacon.

271
189

大正元年十月二十日印刷
大正元年十月廿四日發行

實價金拾錢

不許
——
複製

著者

發行者

印刷所

發行所

柴田勝衛

東京市四谷區大番町卅番地
伊庭孝

東京市京橋區銀座四丁目一番地
教文館印刷所

東京市芝區日陰町二丁目一番地
近代劇協會

終

